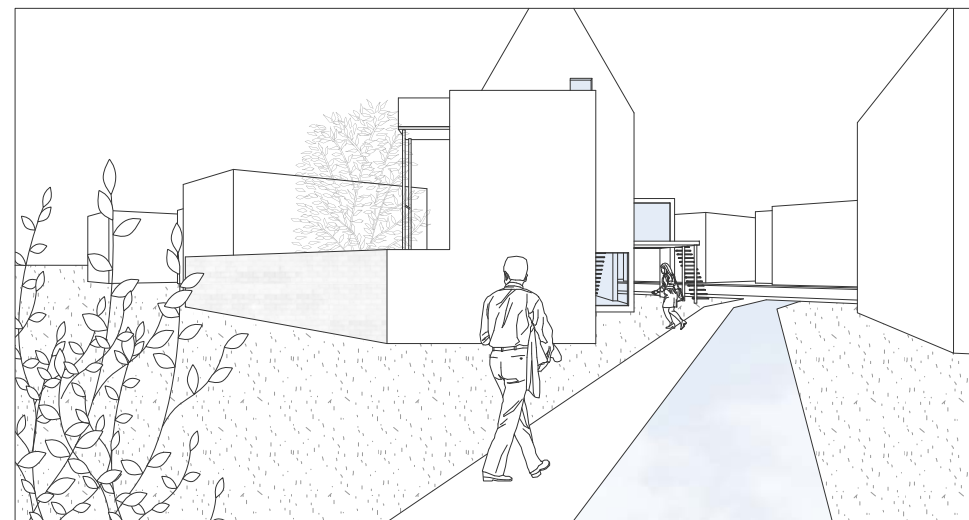
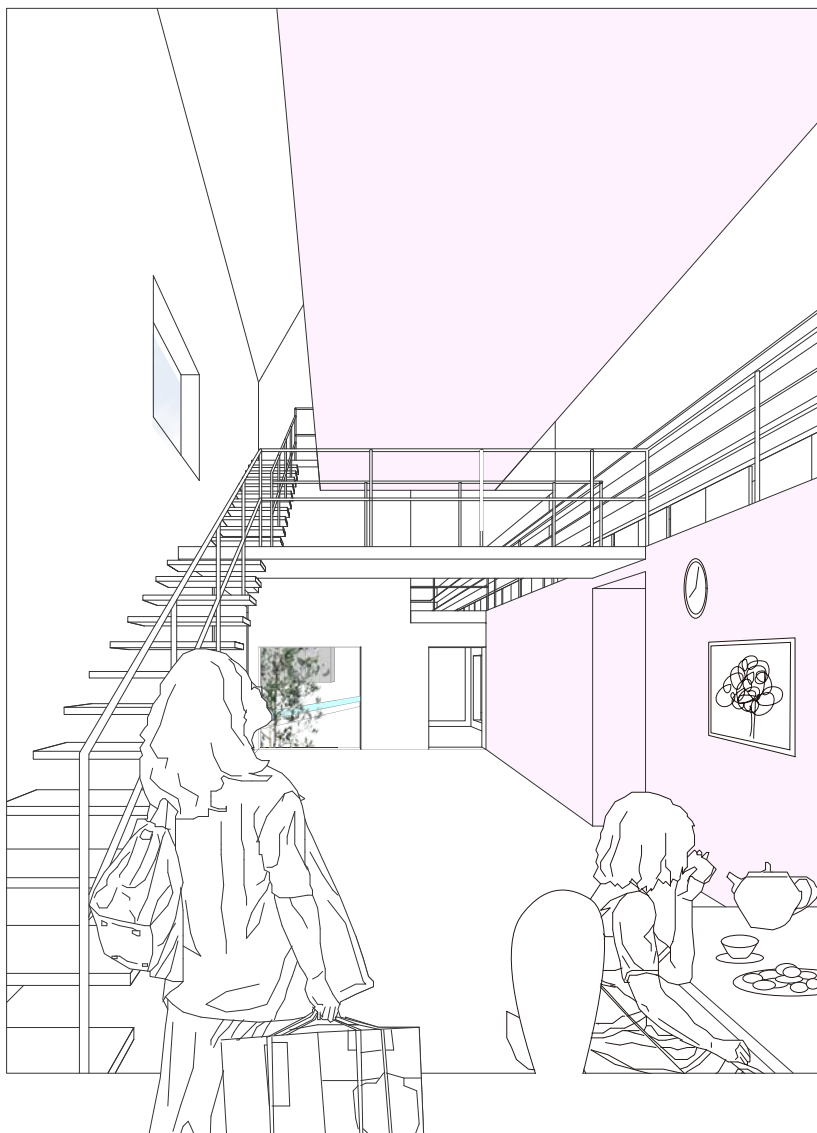
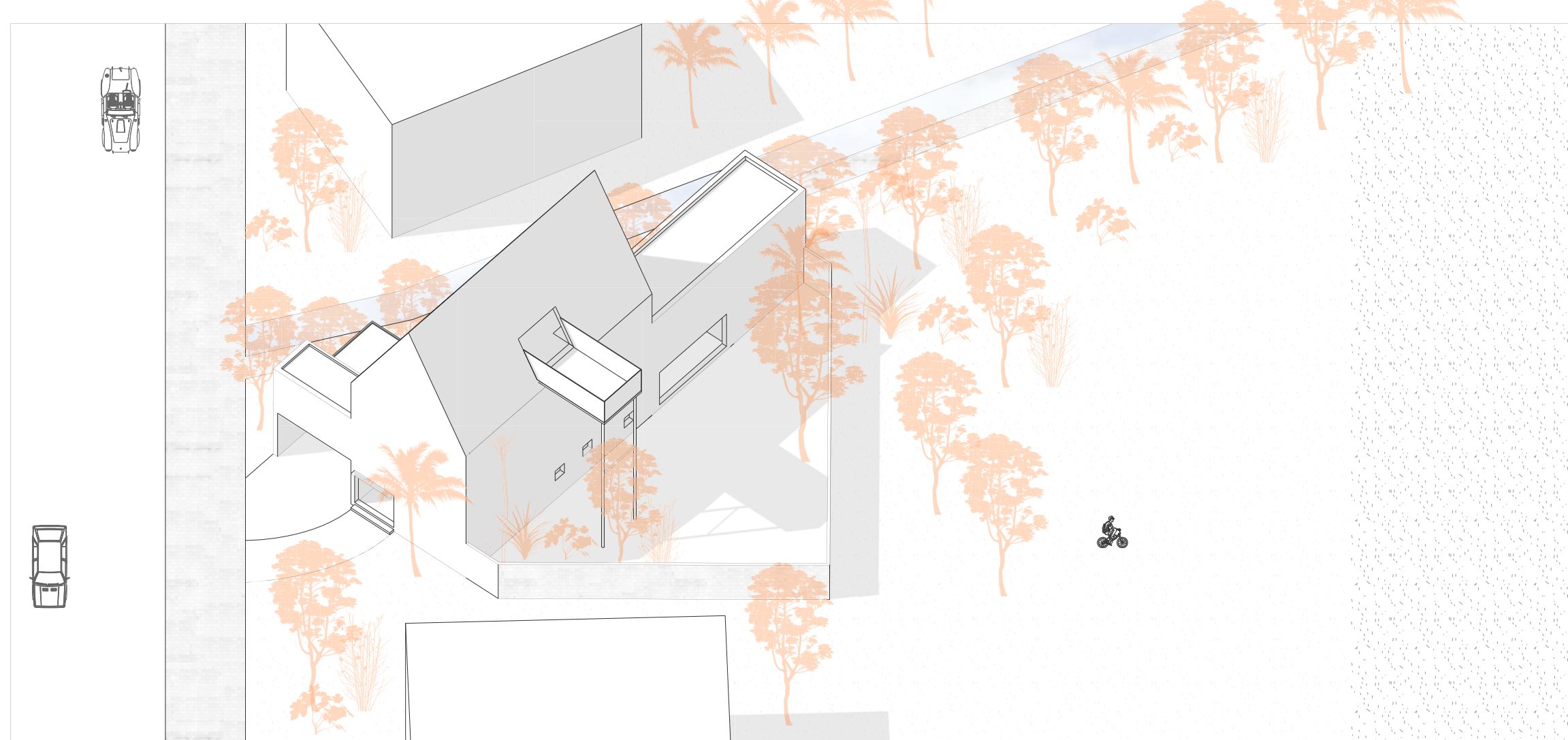
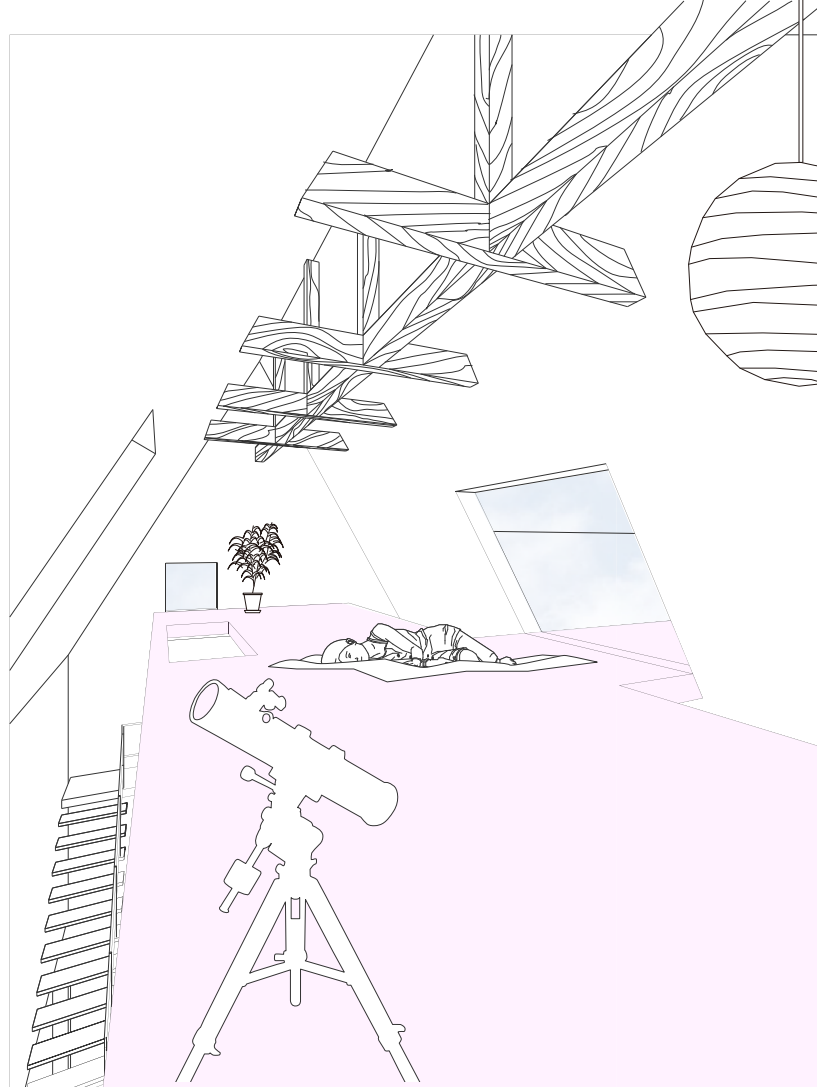




トンガリ船

50年という時間が経過するに従って人間関係は次第に広く、また深くなっていく。と同時に、別れも訪れる。その時の経過を刻み込む家を設計した。

そのキャンパスになるのが、この家のもつ、三つの「大きさ」である。

1、大きな庭

公園に対して遮断された大きな庭。一枚の壁はお互いを守る鎧でもある。家を通りぬけてアクセスすることで家の一部が半パブリックな場所となる。閉じた庭は開かれる段階で人々にアクティビティーを誘発させる。

2、大きな本棚

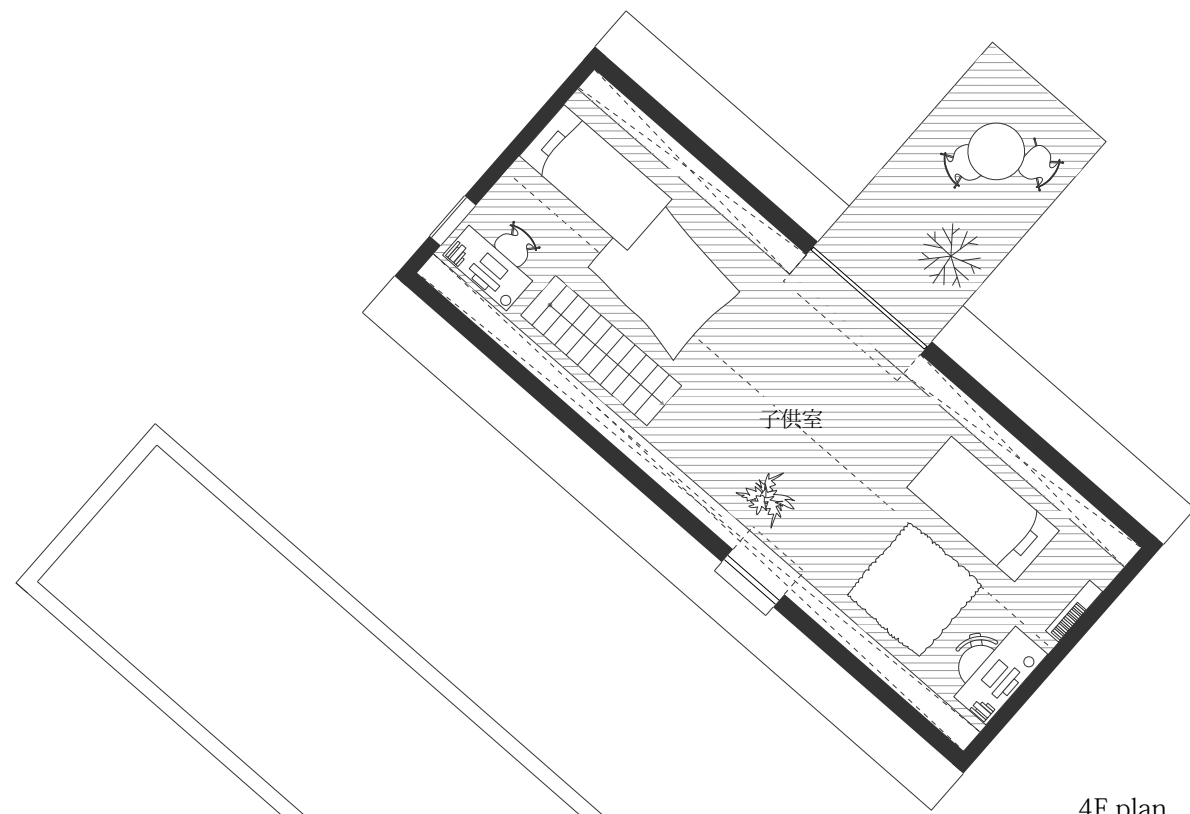
家族の記憶を貯める棚が住宅全体を包み込む。表出された色とりどりものは、時間の経過と共に深みを増していく。

3、大きなトンガリ屋根

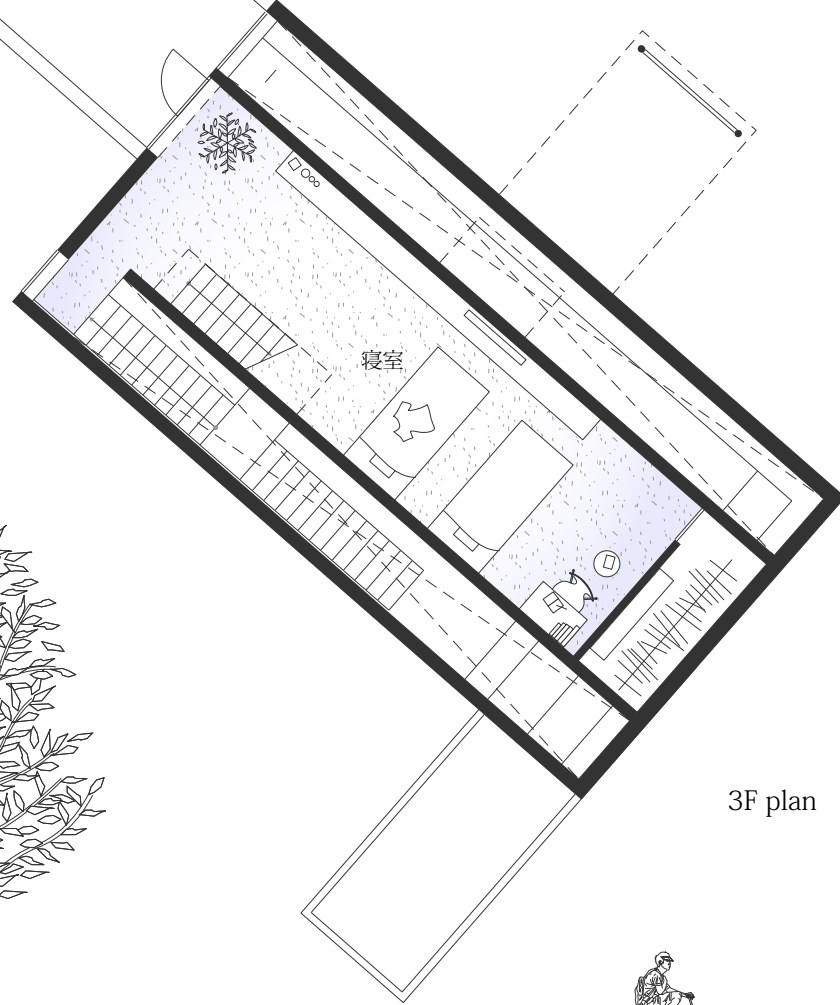
モニュメンタルな屋根がこの場所に一つの景観を与える。建物内部だけではなく、外部にまで記憶を刻み込む。

北陸に建ち、氷山のように切り立つ屋根を持った家は、三つの大きさと共に時の流れをがっしりと抱え込む。

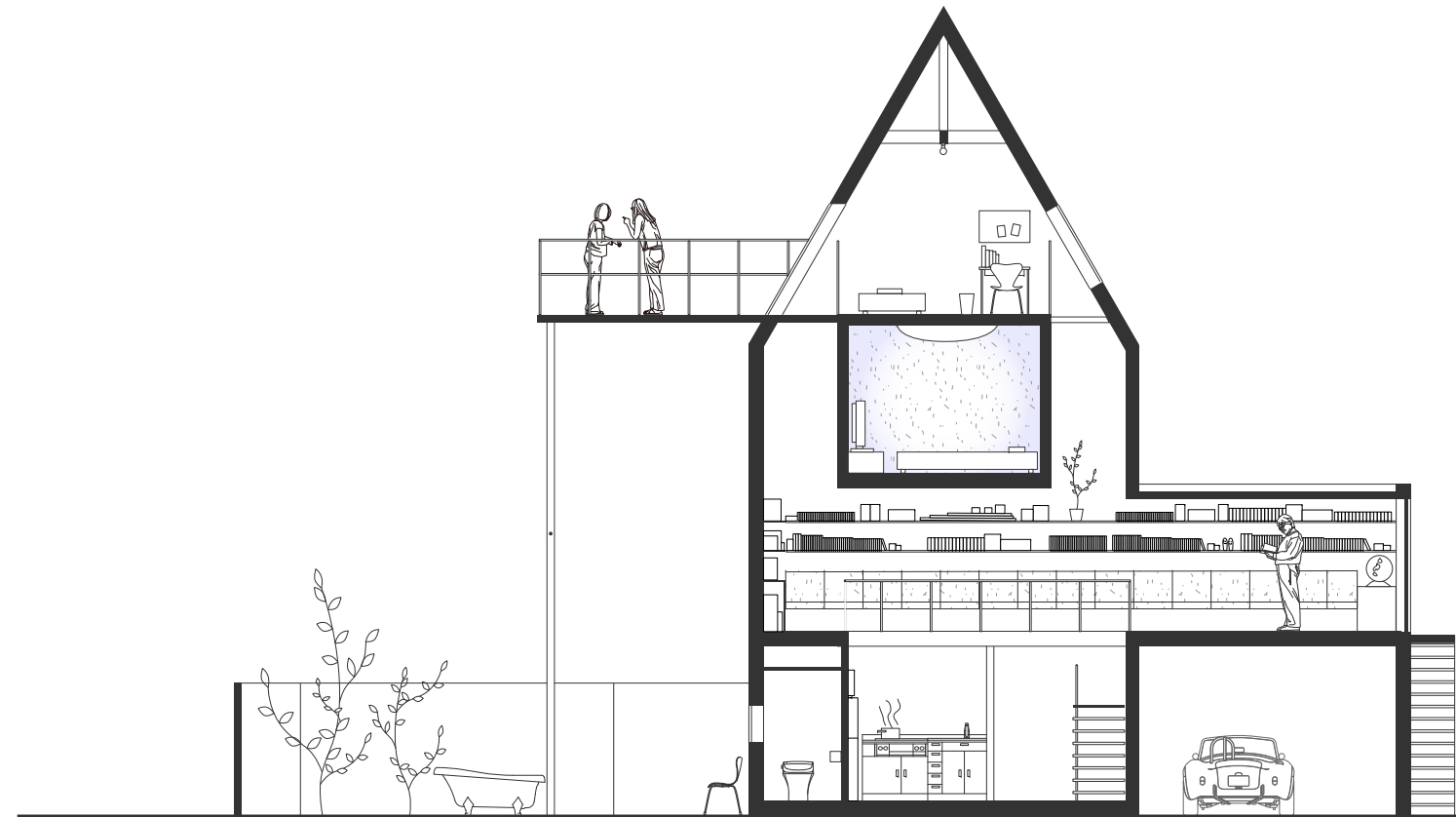
変わらない場所が変わり続けているような、いつまでも楽しませてくれ、それでいて手間を取らせてくれそうな家である。いやしかし、それこそ、住宅に住むということなんだろう。その家が今、時の大海原を出港しようとしている。



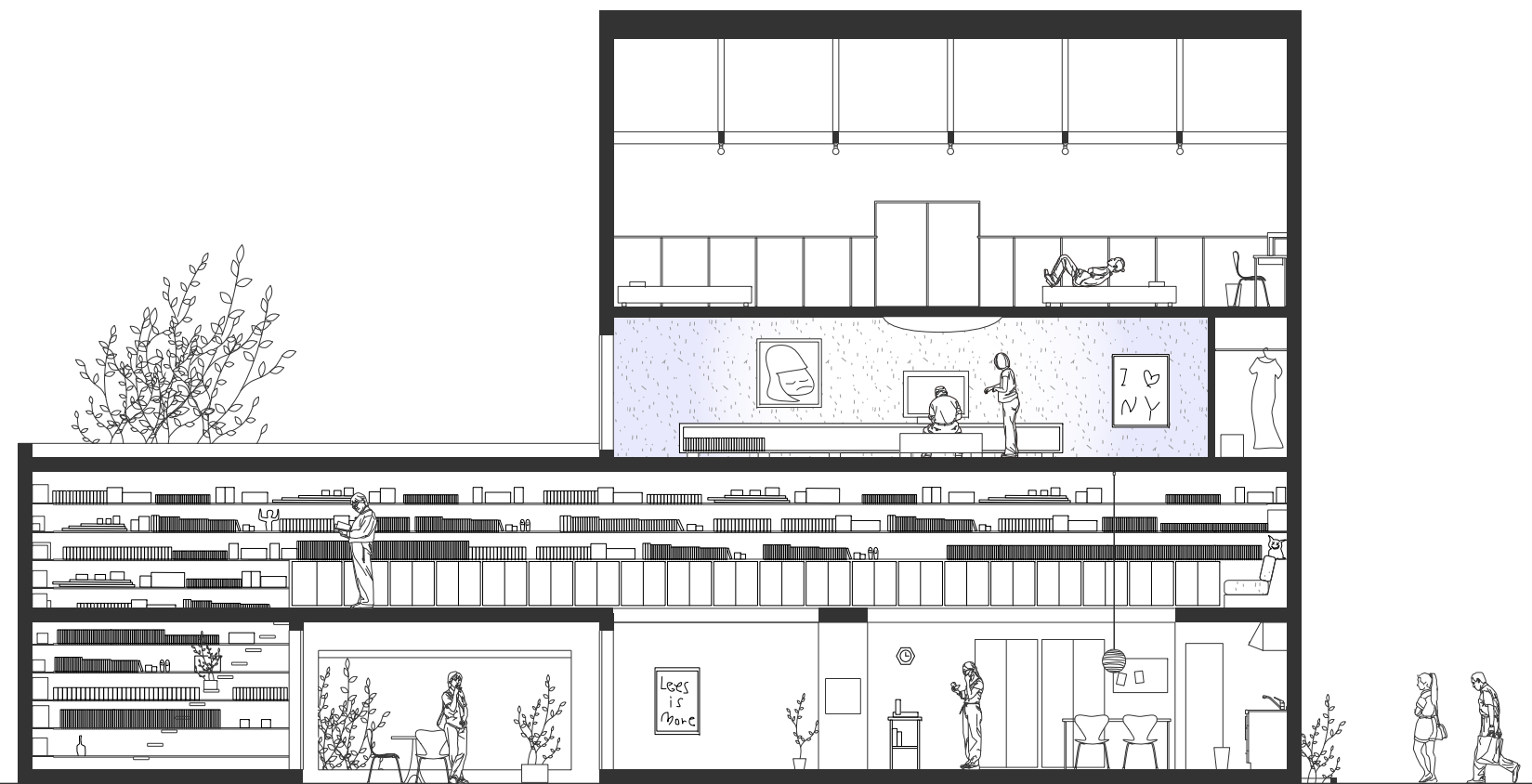
4F plan



3F plan



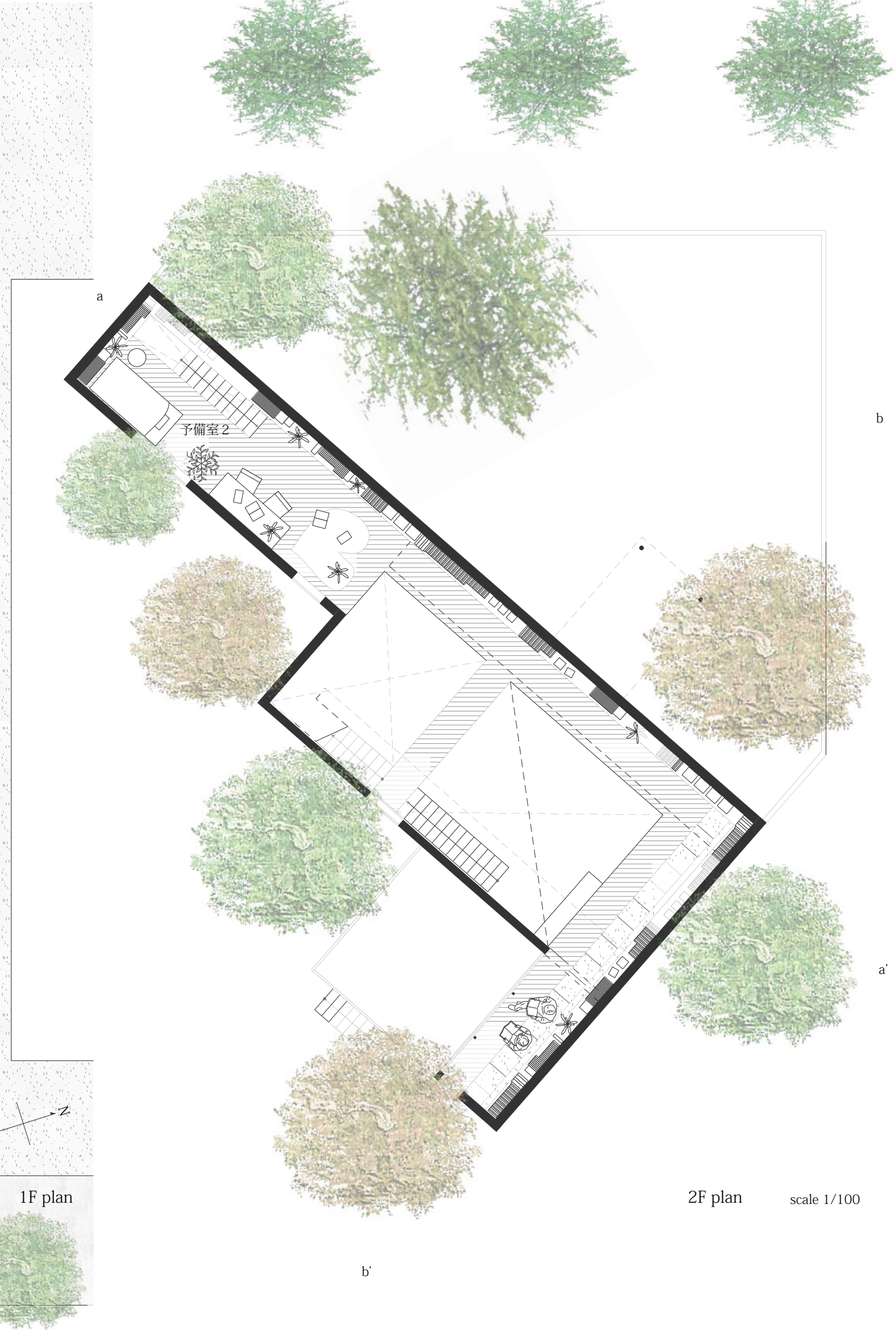
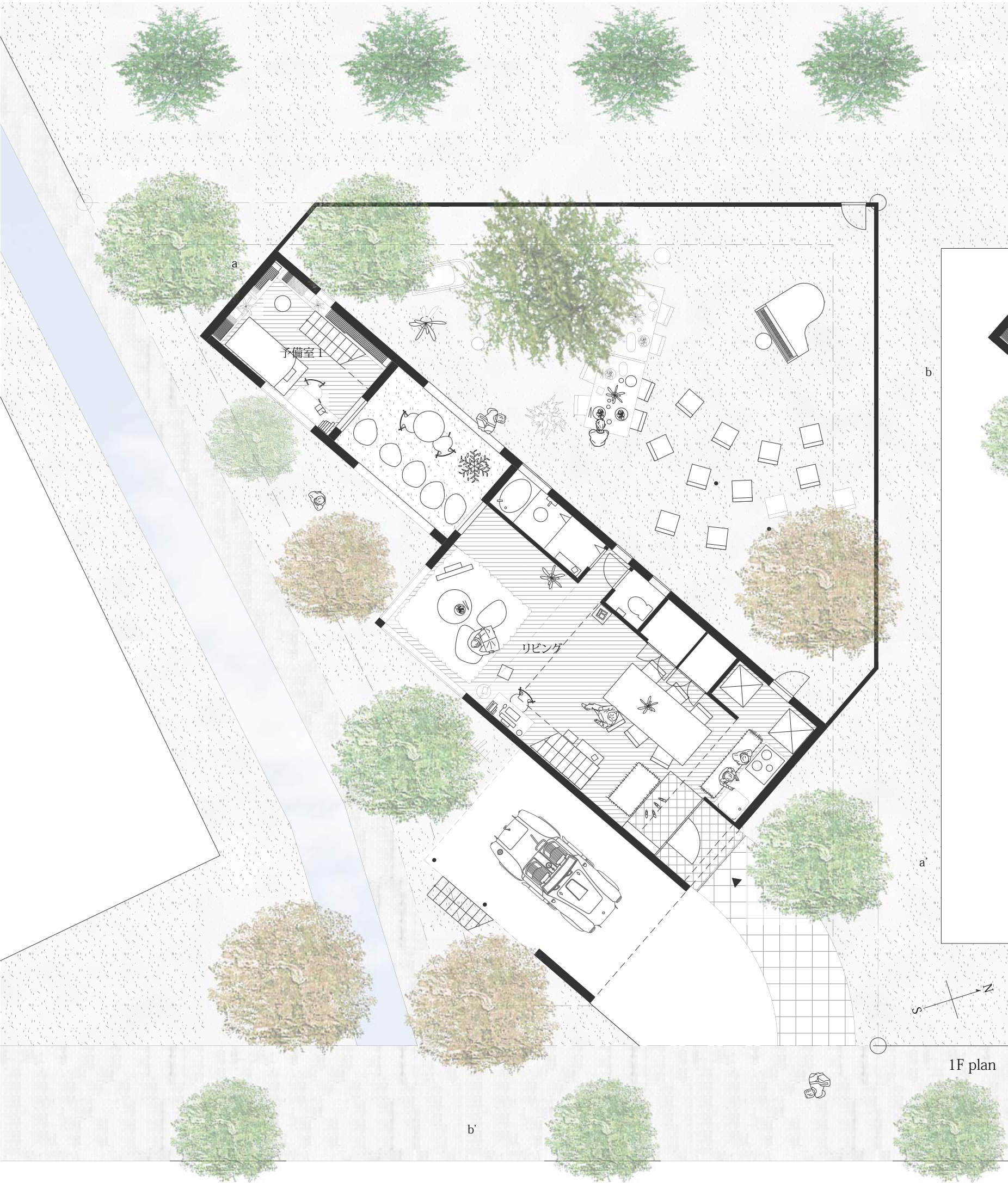
b-b' section



a-a' section

scale 1/100

ハナレとして使われたいた予備室は、将来は妻の両親の場所として使われる。妻の両親も子供も一旦はリビングを通過して自室に入るようになっている。壁を無くし吹き抜けとレベル差で分けられたそれぞれの場所は、掛声一つで互いがいつでもお互いを感知でき、フレキシブルな関係を持てるようになっている。耳を澄ませば、声を上げれば返事が返って来る優しい家である。また、子供室からは自分の庭と隣の公園が見渡せる見晴らし台がある。友達からは木登りの最高峰と呼ばれ、ここではいつも子供たちが何やら怪しい秘密の会議をしているようだ。一方で、夫婦の寝室は唯一閉ざされたボックスとして宙に浮いている。どうやら、静かに映画でも見たい時はこの中が良さそうだ。そんな矢先に、子供たちがドタドタと階段を駆け上がる音が聞こえてきた。そんなこんなで、夫の休日の楽しみは、家から溢れる音を聞きながら、ソファに腰を下ろし、ゆっくり本を読むことであった。時の経過を体全身で受け止めて。

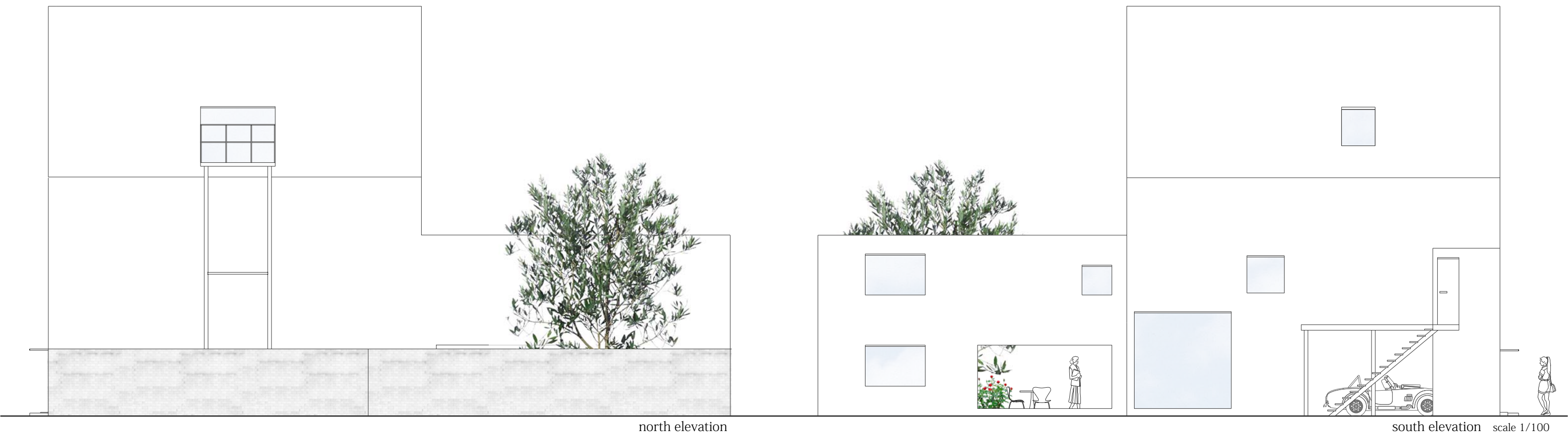


scale 1/100



east elevation

west elevation



north elevation

south elevation scale 1/100